

主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ

皆さんはヘンデルのオラトリオ・メサイアがお好きでしょうか。私も好きです。多くの人々にメサイアが好かれる理由は、2部の終わりに聴衆と一緒に歌うハレルヤ・コーラスのためかもしれません。本当にハレルヤ・コーラスは感動的です。

けれども私は今日、このハレルヤ・コーラスより1部の2番目、3番目の曲に注目してほしいと申し上げたいと思います。それは1部の2番目、3番目の曲が今日ご一緒に読んだイザヤ書のみ言葉を歌詞としているからです。この歌詞の内容は、「メシアが来られる」という希望のメッセージと「メシアを迎えるための準備をしっかりとしなさい」というお勧めです。

ところで、ヘンデルがこのメサイアを作曲した時は非常に困難な状況にあったそうです。ヘンデルのオペラの人気さが下がりつつ、多額の借金を抱えることになり、それゆえ彼が運営していたオペラ劇場も閉鎖することになりました。それにヘンデルは脳溢血によって半身不随になりました。幸いにも温泉で療養をして奇跡的に健康を回復しました。ヘンデルは、このような困難な状況でこのメサイアを作曲したのです。もしかしたら、彼こそメシアが来られることを切に願っており、自分もその恵みにあずかることを望んでいたから、この作品を作ったのかもしれません。彼の信仰のおかげで、ヘンデルはこのオラトリオ・メサイアを通して再起することができ、ヘンデルは「神様は私を訪ねてきた」と告白したそうです。ですから、このヘンデルのメサイアは信仰を通して苦しみと試練を乗り越えていこうとする人々にとって一層意味深い音楽であると思います。

今日ご一緒に読んだイザヤ書のメッセージは、バビロンで捕虜生活をしていたイスラエルの民のために宣べ伝えられたみ言葉です。イスラエルの民らは、紀元前605年から3回にわたってバビロンに捕虜として連れて行かれ、奴隷として生きていました。バビロンで生まれた子孫たちも奴隷として生きなければなりませんでした。その期間はなんと70年ほどになりました。その長い間、イスラエルの民らは、バビロンの人々からの不当な扱いに涙を流し、嘆き悲しみながら生きてきました。ところが思いもよらず紀元前537年、彼らはイスラエルに帰っていくことができました。人類の歴史上捕虜を自分の国に帰らせた例は見当たらないほど珍しいことです。間違いなく国際政治的な何かがあったに違いありません。けれども、イスラエルの民らはそれを「神様の恵みである」と思いました。その時の喜びが、今日ご一緒に読んだイザヤ書にはこのように記されています。

「力を振るって声をあげよ、良い知らせをエルサレムに伝える者よ。声をあげよ、恐れる

な、ユダの町々に告げよ。見よ、あなたたちの神。」(イザヤ 40:9)

ところで、イスラエルの民はただイスラエルの土地に帰って行っただけなのでしょう。彼らがイスラエルの土地に戻っていくのは、イスラエルの土地にエルサレムの神殿があり、そこで神様に礼拝を捧げ、神様のみ言葉に従って生きていけるということを意味しました。聖書を読む時バビロンの人々の機嫌をうかがうことなく、子供たちが異邦文化に慣れてしまったり、異邦の神を崇めるようになることを心配しなくても済むようになりました。けれども、エルサレムの神殿は破壊されているし、住む家もなく、生活のめども漠然としていました。したがって、彼らにとっては決断が必要でした。バビロンに残って異邦人のように生きていくのか、新しい心をもって新しい環境で真の信仰生活をしていくのか。この二つの選択肢がありましたが、信仰生活の方を選ぶということが、彼らにとって「主の道を整え、その道筋をまっすぐにする」ことでありました。

私たちはイエス様の時代にも目を注ぎましょう。皆さんもよくご存知のように当時イスラエルはローマの植民地でした。ローマは当時世界最高の強国でした。ローマは、ヨーロッパの西側からアフリカの北部やトルコ、そして中東を含む広い世界を統治していました。それで当時人口が50万に過ぎなかったイスラエルにとっては、ローマの植民地から抜け出すということははるか遠い夢でした。ヘロデは暴政を振るっていました。宗教指導者たちは自分の安全と利益ばかり考えていました。たまに自分が預言者やメシアであると主張する人が現れたりもしましたが、彼らもヘロデやローマの代わりに民を統治しようとばかり考えていました。いくら目をこすって見回しても、民らを救ってくれる救い主は現れませんでした。イスラエルの民らは救いへの期待は持っていましたが、その期待は漠然としており、彼らは絶望し、無気力になっていました。

その時、洗礼者のヨハネが現れました。そして福音を宣べ伝えました。その福音は「神の国が近づいた」ということでした。これは、イスラエルの民らにとっては解放の出来事であり、昔神様がアブラハムとヤコブと結んだ救いの約束でした。これからイエス様を通して、その救いの約束が実現されるはずです。信仰を持っている人々は洗礼者ヨハネのメッセージを通してそれが分かりました。それは、いくら苦しくて絶望的な現実の中にも、神様の救いの約束を信じて生きていけば、神様は必ず救ってくださるということです。

ところで、今日の私たちの現実はどうでしょうか。私は、今日の私たちが生きている現実もバビロンの捕虜生活をしていた時やイエス様が活動なさっていた時と似ていると思います。たとえ具体的な現実が違うけれども、多くの人々が大変苦しみながら過ごしているからです。その端的なのがコロナ・パンデミックを迎えた現実でもあります。コロナの感染によって、多くの人々が亡くなったり、後遺症で苦しんでいたりしています。仕事を失ったり、ひどい場合は破産に至った人も多いです。貧しい人々はより困難な環境に置かれるようにな

りました。個人的に自由が制限されるのは、軽い苦しみかもしれません。

それでは、このような状況で神様は私たちのためにどういうことをなさるのでしょうか。そこに込められた神様の深いみ心を理解することは難しいです。けれども、明らかなこともあります。それは、バビロンで捕虜生活をしていた民らやローマの植民地の民として生きていた人々に伝えたメッセージを、今日の私たちにも伝えようとなさっておられるということです。それは、どんなに辛い現実であるにも関わらず、信仰と希望を持って生きていけば、神様は必ず助けてくださるといことです。これは神様が私たちに約束してくださった「新しい天と新しい地」に対する希望でもあります。今日ご一緒に読んだペテロ書にはこのように記されています。

「わたしたちは、義の宿る新しい天と新しい地とを、神の約束に従って待ち望んでいるのです。」(2 ペテロ 3:13)

「神様がなぜこのように遅く来られるのか」と思っている方もいらっしゃるでしょう。コロナ禍の状況が長すぎると思っている方も多いと思います。けれども、この長い待ち時間は、私たちのためのものであるかもしれません。つまり、私たちをより成長した姿で導いてくださるためのものかもしれないということです。今日ご一緒に読んだペテロ書にはこのように記されています。

「ある人たちは、遅いと考えているようですが、主は約束の実現を遅らせておられるのではありません。… あなたがたのために忍耐しておられるのです。… わたしたちの主の忍耐深さを、救いと考えなさい。」(2 ペテロ 3:9、15)

ですから、私たちの忍耐深さも救いのための待ち時間であるかもしれません。そして、この信仰を守って生きていけば、きっと神様は私たちに恵みを施してくださるでしょう。

今日、私たちは降臨節の第2主日を迎えました。降臨節はクリスマスを迎えるための準備をし、再び来られる主を迎えるための心の準備をする時間です。これまで教会では、この心の準備のために最も必要なのは悔い改めであると勧めてきました。今日ご一緒に読んだ福音書にも、悔い改めを宣べ伝える洗礼者ヨハネのメッセージが記されています。悔い改めは何より大事な心の準備です。けれども今日、私は皆様に「忍耐深さもその心の準備になる」と申し上げたいと思います。今日ご一緒に読んだ福音書とイザヤ書には、「主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ。」という勧告が記されています。この「主の道を整え、その道筋をまっすぐにすること」も、私たちの忍耐深さかもしれません。

コロナの状況は私たちが思った以上に長くなるかもしれないそうです。どうか、お祈りを通して神様に頼りながら、またヘンデルのメサイアをお聞きしながら、信仰のうちに、忍耐をもってこの困難を乗り越えていくことをお願いいたします。神様は皆さんを守ってくださるでしょう。

この一週もイエス・キリストの知識において、成長し、信仰と忍耐深さをもってこの世に打ち勝つ勝利を得られますように心からお祈りいたします。